

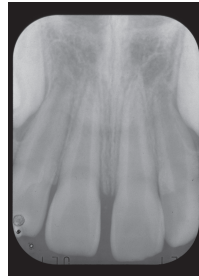
6-2. スーパーボンドの臨床応用例

3. 外傷歯の固定

臨床例3-1 スーパーボンドによる外傷歯の暫間固定



①2003年3月。10歳男性。受傷1週間後に来院。側方脱臼と陥入の合併症と診断する。



②初診時、デンタルX線像。1|1と2|2のセメントエナメルジャンクションの位置に注目。



③1|1は鉗子による復位修復の後、固定用ワイヤーとスーパーボンドによる暫間固定をする。



④受傷2週間後の正面観。暫間固定は10日後に撤去。



⑤受傷2週間後に1|1にTransient Marginal Breakdownが認められたが、約1ヶ月後に消失。



⑥2005年6月。受傷2年2ヶ月後の正面観。アンキローシスは無く、順調に歯間空隙の閉鎖が行われている。歯冠色に変化が認められるが臨床症状は無く、電気歯髄診はマイナス。



⑦同口蓋面観。



⑧同デンタルX線像。1|1には歯髄腔の狭窄(Pulp canal obliteration)が認められるが、1|1には認められないため、抜髄根充を行う。



⑨2011年10月。受傷8年6ヶ月後の正面観。1|1にアンキローシスも低位咬合も認められないが、1|1色調の変色が認められる。



⑩同咬合面観。

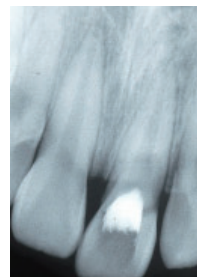
臨床例3-2 スーパーボンドによる外傷歯の暫間固定



①12歳男児。歯冠及び歯根破折のため、断髄を受けたが、その後の治療を依頼する紹介状を持参し、来院。1|1の歯冠歯頸部から口蓋側歯肉縁下まで破折線は続いており、動揺度2。



②歯冠の位置を整復しつつ、隣接面にスーパーボンドで接着固定した。



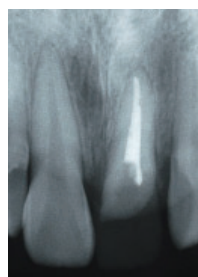
③歯冠・歯根破折線と断髄後のセメントが見える。



④2週間固定後、歯冠側破折片を除去した。



⑤歯根側は矯正的に挺出化を図った上、仮封冠で修復を行いつつ、抜髄根管充填を行った。



⑥術後1年4ヶ月経過。ほぼ良好に経過している。